

# 地域と協同の 研究センターNEWS

2024年11月25日発行

国際協同組合年とアイデンティティ協議の年を迎えるにあたって

前田健喜（日本協同組合連携機構 C.I.・国際・研究チーム 部長・主席研究員）

昨年12月、国連は2025年を国際協同組合年（IYC）と宣言した。協同組合の持続可能な開発目標への貢献を評価しそれを進めるために、2回目の国際協同組合年を呼び掛けたものだ。協同組合のSDGsへの貢献として国連決議の中で挙げられているのは、貧困と飢餓の解消、社会的包摂、女性や若者の参加、ジェンダー平等、女性の能力構築、気候変動の適応と緩和、持続可能な社会への公正な移行、持続可能で強靭かつ包摂的な食料システム、食料安全保障、雇用や仕事の創出、医療・金融・住宅・デジタル技術へのアクセス、平和構築といった分野であり、協同組合の自発的な協同、相互扶助、民主的・参加型ガバナンス、自治と独立、人びとや社会的目的を資本よりも優先すること、といった仕組みだ。

\* \* \*

仮にこれを、まあいわば勝手に、国連のほうから見てみるとする。

持続可能な開発目標（SDGs）は掲げてみた。しかし、二酸化炭素の排出量は増え続けている。世界は分断され対立し、戦争が激しくなっている<sup>1</sup>。貧困もある。格差もある。人類が獲得してきた表現の自由や報道の自由も脅かされている。高齢化や少子化がすすむ国もある。例えば日本では、地域の持続可能性が問われている。ケアをどうするのかも大問題だ。

こうすればうまくいく、という処方箋はない。でも、何とかしようとする人々の動きはある。人びとの少しずつ世の中をよくしようという取り組みはある。希望もある。少しの光も見える。その光を国連としてどう掬い上げてとて広げるか。後押しするか。そこにいたのが協同組合だ、と言えないだろうか。

国連としてビジョンは掲げた。「誰もが物質的に必要なものを手に入れることができ、尊厳を持って生きることができ、地球環境も劣化させず持続可能な世界」という納得できる世界像だ。でも、そこに至る道筋はよく見えない。誰にもわからない、といつていいだろう。「これをやればいいける」という確実な道は見えない。誰か全体を俯瞰できる人がいて、「これをやりなさい」「これをやれば確実に持続可能な社会を創ることができますよ」ということにはなっていない。それでも人びとが自分の周りを少しでもよくしようと、てんでに取り組んでいる。その中に希望がある。

【2ページにつづく】

## 研究センターNEWS242号 訂正

前号（242号）で、ご紹介した野原敏雄先生のお話について2ページ、32行目、「サブスククリプト」は「英文の抄訳」に訂正いたします。（事務局：伊藤）

## 地域と協同の研究センター 11月の活動

2日（土）	友愛協同セミナー公開企画	17日（日）	消費者革新懇親会
4日（月）	労働者協同組合法學習会		サードセクター研究会（経済学・経営学部会）
5日（火）	名城大学ボランティア入門第8回、あいち在宅懇話会	19日（火）	名城大学ボランティア入門第10回、第8回常任理事会
6日（水）	第16回愛知の協同組合間協同連絡会（幹事会）	21日（木）	三河地域懇談会世話人会
7日（木）	尾張地域懇談会世話人会	23日（土）	アジアボランティアネットワーク東海世話人会
8日（金）～9日（土）	第5回協同の未来塾（こうべ協同学苑で開催）	26日（火）	三重地域懇談会三重のつどい「ささえあいの家」訪問、名城大学ボランティア入門第10回
9日（土）～10日（日）	ウクライナ避難民支援大交流・相談会	27日（水）	研究フォーラム環境世話人会、どうかゝり食農健サポートクラブ「第8回食農健のちょっといい」なし
10日（日）	多文化と災害公開セミナー（愛知県立大学共催）	29日（金）	第87回生協の（未来の）あり方研究会
11日（月）	地域における子どもの学習支援研究会	30日（土）	第5回生協職員マイスターコース 第6回地域共生フォーラム、あいち在宅懇親会
12日（火）	名城大学ボランティア入門第9回		
14日（木）	くらしと平和憲法を守る実行委員会		

目次	国際協同組合年とアイデンティティの協議の年を迎えるにあたって 『協同の縁』交流会in飛騨高山	1	メトロポリス国際会議（移民をテーマにした会議）に参加して 情報クリップ	5
		3	書籍紹介「韓国文学の中心にあるもの」	6

<sup>1</sup> 国連の「SDGs 報告 2024」によれば、武力紛争における民間人の死傷者数は2023年に72%増加した。

## 【1ページからつづく】

そういう取り組みを国連としてはどう扱い上げればよいか。どう打ち出せばよいか。

国連が打ち出すのだから、それなりの実績や広がりは必要だ。そんなふうに国連が探していると、人類がその歴史の最近の200年間のなかで試してきた協同組合という仕組みがあることを思い出す。世界の10億人が組合員となっている。十分な成功した事業形態と言える。これを後押ししようじゃないか。

SDGsとして目指すビジョンを掲げた国連にとって、そこに至るために何をすればよいか（what）はわからないけれど、どうやればよいか（how）は相当確かな事例がある。それが協同組合だ。

つまり国連はSDGsの達成に向けて、「何を」を打ち出すのではなく、協同組合という「いかに」に賭けた、と言えるのではないか。「何を」への正解はないけれど、「いかに」だったら答えが一つはある、それが協同組合だ、と。そんなふうに理解できるのではないか。少なくともそう受け止めて悪いことはない。

\* \* \*

こんなふうに私が思う根拠は、人びとの願いやニーズを形にしてきた協同組合の実際の取り組みだ。2022年7月の第100回国際協同組合デーにあたり、ICA会長はこう述べた。

「協同組合は常に、今ある世界とは異なる世界が可能であることを示します。社会正義のある世界、自然との調和のとれた世界、そして、平和な世界。（中略）

この世界を、私たちと将来の世代の誰もが尊厳を持って生きられる場所へ、私たちは日々変革しているのだと確信を持ちましょう。」

実際、協同組合は、希望と想像力を持って、これまでなかったものを生み出してきた。そして、今も、日々活動し、生まれてくる組合員のニーズと願いをかなえ続けている。日々世の中をよくし続けている。

さらに、地域と協同の研究センターが着目してきたさまざまな地域における住民・組合員が主体となったさまざまな取り組みがある。一人一人が思ったことを口にし、共通の願いを形づくり、それを実現していく、という協同組合のやり方を活用しながら、力を合わせて地域をよりよくしようという取り組みがある。先日10月9日に飛騨で行われた「『協同の縁』交流会in飛騨高山」（IYC2025全国実行委員会の認定事業の第1号となった）で発表されたJA愛知東、JAひだ、JAグリーン近江における、それぞれの組合員・住民主体の取り組みもそうだ。協同組合が生まれようとしているところ、とも言えるだろう。そこにも私は希望を見る。

\* \* \*

「何を」に正解がないのだから、私たちは協同というやり方を使っていろいろやってみるしかないということになる。

コープみやざきの真方顧問のお話を聴く機会が最近あった。コープみやざきでは職員は、組合員のことを考え、組合員にとってよいと思ったことは自身の判断でやってよい。コープみやざきの「基本的考え方を支えるキーワード」には「目の前の組合員さんによかれと思ったことは自分の責任で判断して対応してください」とある<sup>2</sup>。真方顧問は「失敗を責めない」ということもあわせて強調しておられた。

よかれと思ったらやってみる。その結果、やってみられたことは膨大な数に上るだろう。そこにはうまく行くものも行かないものもあるだろう。けれどやってみたことはすべて、この世界に播かれた種だとも考えられる。いつかどこかで芽を出すかもしれない。誰かが水をやり始めるかも知れない。

そんな考えは、最近読んでいるレベッカ・ソルニットという米国の文筆家・アクティヴィストの『暗闇のなかの希望』という本から共感しながら学んだ。同書の冒頭（エピグラフ）に彼女はこんな言葉を掲げる。

「過去に起こった出来事は、歴史にとって何ひとつ失われたと見なされてはならない」

——ヴァルター・ベンヤミン

「ニュースがお気に召さないようでしたら、外へ出て、ご自分のニュースをつくってみましょう」

——報道記者ウェス・ニスカー（1970年代、KSANラジオ局での番組の締めの挨拶）

「正解はわからない。でもいいと思ったらやってみよう。世の中になければ自分たちで創り出そう。それが協同組合だ」。2025年をIYCとした国連の思いを勝手に推測しながら、私はそんな気持ちになっている。

2025年はIYCであるとともに、ICAの提起したアイデンティティ協議においては、11月29日のICAインド総会で議論のための声明改定案が承認されれば、世界中で議論がなされる年ともなる見込みだ。

そういう2025年が、協同や協同組合をみなで考え、話し、アイデアを出し合い、試してみる、そんな年になったら素敵だな、と私は妄想している。

（まえだ けんき）

<sup>2</sup> <https://www.miyazaki.coop/contents/wp-content/uploads/2023/01/keyword.pdf>

## 『協同の縁』交流会 in 飛騨高山—2025国際協同組合年 認定事業 第1号!

～今だからこそ、人と人の繋がりを見つめ直す～

報告：伊藤小友美（事務局）

2024年10月9日（水）、「協同の縁（えにし）」交流会 in 飞騨高山が、岐阜県高山市のJAひだ地域農業管理センターで開催されました。参加者は、JAひだ、JA愛知東、JAグリーン近江、JA伊勢（オンライン）の約120名です。この交流会は、2025国際協同組合年の認定事業の第一号となりました。研究センターは企画・進行で協力しました。『鷄頭』（地域と協同・研究誌）第6号（2024年11月20日発行）でも、内容についてご紹介していますので、参考ください。このニュースでは地域の先進事例報告について、ご紹介します。



冒頭、日本協同組合連携機構の前田健喜さんからは、「地域の拠点を中心に活性化に取り組んでいる事例を交流してその取り組みを高める意義深い会だと思います。場の重要性について学び合う貴重な会になると思います。」と期待の言葉がありました。続いて、経過報告がコーパスぎふ飛騨支所の松原滋さんからありました。人口減少のもと、農協や生協、行政の枠を超えた繋がりが生まれていること、やなマルシェとの出会いが契機となり交流が継続していること等が話されました。

### 1.「共に育む、笑顔あふれる桜谷の未来」 桜谷農村RMO推進協議会 会長 加納文弘さん 西河正樹さん 田上真由美さん

活動のきっかけは、JAグリーン近江日野北支店が突如閉店になったことです。地域住民がびっくりするほど急なことでした。何回もJAに赴き、国のRMO事業（注：農村RMO<Region Management Organization>とは、複数の集落の機能を補完して、農用地保全活動や農業を核とした経済活動と併せて、生活支援等地域コミュニティの維持に資する取り組みを行う組織のこと）があることを聞き、桜谷地域農村RMO推進協議会を立ち上げました。地域が活気づくようなことをしたい、若い人に住んでいただける地域づくりをしたいと思って、活動しています。JAの支店に来てもらうことを心掛けて、カフェの準備をしています。子どもから大人、高齢者が集まるような企画をしていきたいと考えています。

滋賀県の蒲生郡日野町の桜谷地域は、3443haのうち、経営耕地面積は449ha、ほぼ山という地域です。子どもたちがどんどん減り、子どもは7%しかいない地域です。どんどん過疎化、高齢化がすすんでいます。

農用地保全と、地域資源活用、生活支援の3つの取り組みをすすめています。農用地保全では、15集落の地域計画をしっかりつくります。スマート農業の研修を地域計画に生かしたいと思っています。農用地保全の取り組みと地域資源にかかわるのですが、耕作放棄地に和ぐるみを植える取り組みをすすめています。日野町には日野菜という特産品があり、JAの加工場があります。使っていない時期に、放棄竹林の

たけのこを探り、メンマをつくることにしました。日野菜の焼酎も試作をして、地域資源として考えています。

生活支援としては、軽食や喫茶ができる気軽に集まれる場を考えています。利用者と支援者の共生も考えていきたいと思っています。今後、認知症予防にも取り組みたいと思います。

### 2. あさひ・たかね地域を照らすSUN・SUN会 顧問 石原正裕さん

1995年、朝日村は2177人、高根村は856人だった人口が、2024年10月1日現在、高山市朝日町1389人、高屋市高根町268人です。高齢化率は、朝日町42.3%（市内3位）、高根町68.2%（市内1位）の超高齢化地域です。平成の大合併以降、人口は減少、地域経済は大きく低下し、地域産業は衰退してきました。地域での暮らしの変容が始まり、様々な課題が顕在化してきました。

そこで昨年、朝日町・高根町の10年を見据え現状の課題の洗い出しと、その地域課題に対してどの様な取り組みにより改善の道を探るのか、地域連携会議で協議を重ねました。現在の地域力は右肩下がりです。この地域力を支えるのは、生まれ育った地域への愛着が大事で、愛着を糧に地域への気づき、地域をつなぐ活動があるのか、地域を自慢できる人がいるのかがカギです。

JAひだの協力により、旧Aコーパスを活動拠点にすることで、私たちの活動が成り立っています。共に考え・取り組む地域住民組織SUN・SUN会で、人材育成を重ね、主体となる基盤を構築してきました。その先に、地域基盤の強化

があります。協同の力が地域を立て直すという考え方です。

何を共に目指すのか。共生・共助・共働くの3つです。地域循環型の環境づくり、活動の仕組みづくり、顔がみえる人との縁づくりです。目的は喜楽（きらく）と表現しました。造語です。気楽に訪れ、共に喜び楽しむ、そんな施設、活動を目標としました。

補助金を活用して、SUN・SUN ハウスとしての活動が始まりました。落語を聞いたり、健康体操をしたり、福祉の講義もあります。莊川村の村芝居、朝日中学校生徒の心温まる合唱では、涙された方もたくさんありました。参加者からは「コロナで人と会うことも少なかったが、こんなに楽しかったのは久しぶり」と喜ばれました。魚釣り教室、e スポーツ大会なども開催しました。地域の方々が先生になってワークショップや、防災体験も行いました。SUN・SUN まつりには、延べ600人が参加しました。すべての世代が手を取り合い、かかわりあえるような姿こそが、明日への光を照らすのだと感じられました。

互いを尊重し、顔の見える開けた地域コミュニティを形成していく、善意の場である事が重要となります。これは個人や地域の良い状態を育むウェルビーイングへと導く活動となります。課題に対して、行政の力やまちづくり協議会など、各種地域団体との連携、利害関係を含むステークホルダーとの連携など、より強固な関係性を築きながら、推進してきます。SUN・SUN 会は、持続可能な地域であるための協同の縁の活動、新しい農村の仕組みづくりに取り組みます。

### 3. 「地域ささえ愛組織」は愛郷（あいきょう）心 JA 愛知東「地域ささえ愛組織」代表 加藤久美子

地域ささえ愛組織は、愛郷心からはじまった組織です。

JA 愛知東は愛知県の北東部に位置し、面積は愛知県の5分の1です。私たちの組織は、既

**<交流会に参加して>** SUN・SUN 会の報告の終わりに、朝日中学生の林夏帆さんの意見発表の動画を見せていただきました。他の中学校の仲間と合同で吹奏楽の演奏をし、地域を超えて人同士がつながり一体感を味わうことができたこと、自分たち中学生も人とのつながりの一端を担うことができる、未来の中心になれると思ったとの発表で、「人同士がつながる未来をつくるため、積極的に若者のパワーを出していきたいと思っています。」と結ばれていました。SUN・SUN 会で活動している祖母の姿を身近で見て、大事なことを日々、学ばれている姿にとても感動しました。

グループワークでも、終了後の懇親会でも、生き生きと言葉を交わし合う人たちで会場は熱気に包まれていました。同じような悩みを抱えつつ、地域で協同することで課題解決にあたろうとする人たちの縁（えにし）は、第一回目の交流会でしっかりと深まりました。特に地域でがんばる女性たちの活躍は、新しい未来を感じさせるものでした。次は、5月に近江で開催されることが決まり、横断幕が引き継がれたことを最後にご報告します。

存の3つの組織が協同して結成されました。その3つとは、女性部『やなマルシェ』、助け合い組織『つくしんぼうの会』、女性部『北設支部』と助け合い組織『ドレミの会』です。

普段からこの3つの組織は活動していたのですが、管内の高齢化率も高く、もっと地域のために何かできないかと模索していました。そんなとき、JA 愛知東が高齢者支援のためのアンケートを取りました。「今後、この地域に住みますか。それとも施設に入りますか。まちに引っ越しますか。」との質問には、「今の場所に住み続けたい」という回答が80%以上ありました。「お弁当を作って安否確認を兼ねて配達をしたらどうか」という声があり、高齢者支援のプロジェクトを設立することになりました。一番のポイントは、地域の男性、子どももみんなかかわることが必要ではないかということです。高齢者支援のサポーターを募集したら、89名の申し込みがありました。16名が男性です。これには私たちも感動しました。まずは、お弁当を作ることにしました。調理実習が必要ですが、コロナ禍なのでWEBで行いました。社協から専門的な心得も学びました。生活支援サービスでは草刈りの依頼が必ず来るので、刈り払い機講習会を開催、技術を身に着けました。

そして3つの拠点でお弁当作りが始まりました。お弁当は「愛ちゃん弁当」と名付けました。それぞれの地域で男性が活躍していることをうれしく思っています。独居の方が多く、会話の機会があまりないので、コミュニケーションを大事にしています。現在は85名で活動しています。

新たな取り組みとして、買い物代行も始めました。地域の要望を聞き、常に新しいことに取り組んでいます。「おたがいさま」の気持ちで、できる人ができる仕事をやっていく、それを口コミで広げながら活動しています。地域ささえ愛の思いとしては、地域がつながり、笑顔あふれるささえ愛です。

（いとうこゆみ）

## メトロポリス国際会議（移民をテーマにした会議）に参加して

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は10月31日現在2,718人、在留者数は1,984人です。男女別では男性が788人、女性が1,930人、年代別では18歳未満が419人、18歳以上61歳未満が1,929人、61歳以上が370人です。東海地域では、愛知県は109人と微増、岐阜県は12人、三重県は1人と変化はありません。東京は625人、大阪は142人と増加しています。

4月に東京で始まった補完的保護対象者に向けて行われた支援プログラムが9月末で終了しました。このプログラムで日本語や日本での生活に必要な知識を学んだウクライナ避難民は次のステージを模索しています。

また身元保証人がいない人のために日本政府が提供していた2年の生活支援が終了する人、日本財団が提供していた3年の生活支援が終了する人が出てきています。生活支援金が提供されている間に安定した収入を得ることができるようになった人もいますが、そうではない人もいます。高齢で就労が難しい人たちもいます。生活支援金が終了するタイミングと、安定した収入を得ることができる仕事に就くことができるタイミングにギャップがあると、精神的に不安が大きくなりますし、実際の日常生活にも影響が出てきます。そうならないような支援が必要ですが、なかなかスムーズにはできていない人もいます。

11月14、15日にメトロポリス国際会議という移民をテーマにした会議に参加する機会がありました。会議のテーマは「移住の未来：デジタル時代の進化する課題」で、東南アジアを中心に、カナダやオーストラリア等、移民・難民を多く受け入れている国からの参加が多くありました。東南アジアではミャンマーから避難するロヒンギヤの避難や受け入れが大きな課題として多くの報告者から報告がされました。また、カナダやオーストラリアの報告者からは、移民・難民の受け入れと社会統合のための様々な取り組み事例や制度が紹介されました。この他にもオーストラリアの小さな町全体で、移民の受け入れの住民主導の事業を自治体がサポートする事例や、インターネットを活用した難民の就労マッチングの仕組みなどの報告がありました。

中でも関心を持ったのは、カナダ政府が進めている民間難民受け入れの制度です。どのような制度かを、調べてみました。

難民はカナダに入国すると永住の在留資格が付与されます。連邦政府と州政府の医療保険に加入をするので、医療は無料です。語学習得のためのレッスンも無料で受けることができます。医療と語学習得は政府が担保し、それ以外の支援を民間が担います。入国後の1年間の生活に責任を負って、スポンサーが難民の人の自立を促します。難民1人を受け入れるには約100万円（12600ドル）が必要と言われています。そのためスポンサーになるには、1年間の支援費用を用意しなければなりません。スポンサーは3通りです。①政府が認証した団体やカナダ在住の移民・難民が組織した団体 ②18歳以上のカナダ国民もしくは永住者の5人以上で構成されるグループ ③地域組織です。受け入れを希望するグループに対しては、事前に説明会が開かれ、グループは必要となる支援の費用を集めます。またそれぞれの難民とのマッチングを進めて、決まればスカイプやメールで連絡を取り合います。カナダに入国するまでの間（3~4年）に、受け入れ団体は住居や生活用品の準備を進めます。実際に受け入れるまでの間、難民と連絡をとり続け、難民が入国する時までにはお互いのことを知り、信頼関係も構築していることを目指します。難民が入国すると、受け入れグループが、難民と一緒に行政手続きや学校の手続き、就職支援なども行います。

このほかにもオーストラリアの小さな町全体で、移民の受け入れの住民主導の事業を自治体がサポートする事例や、インターネットを活用した難民の就労マッチングの仕組みなどの報告がありました。

これらの事例から、日本が学ぶことができることはたくさんあります。日本でも、ウクライナ避難民をはじめとする難民背景の人たちが増加しています。地域のなかで、市民が迎え、新しい生活を始めるサポートを、難民の人たちと一緒に丁寧に行うことができたら、同じ地域で暮らす市民としての受け入れが今よりスムーズに進むであろうと思います。

※参照：難民支援協会ウェブサイト（難民支援協会 <https://www.refugee.or.jp/>  
(かんだ すみれ)



# 情報クリップ<sup>®</sup>

co-opnavi 2024.11 No.870

## 子どもや若者の未来を育む生協の取り組み

日本生活協同組合連合会 2024年11月 A4判 32頁 363円（消費税込）

<私たちの「この一枚」> コープぎふ  
 新設「飛騨支所」 飛騨支所 支所長 小屋博一  
 特集  
 子どもや若者の未来を育む生協の取り組み  
 <今日も笑顔のコープさん> いわて生協  
 <想いをかたちに コープ商品>  
 CO・OP信州産ストレートトマトジュース  
 <生協大好きママコープ山さんの 教えて！CO・OP商品>  
 CO・OP讃岐えび天鍋焼きうどん  
 <地域・社会づくりREPORT> とやま生協

<組合員に支持される店づくり・売場づくり> コープさっぽろ  
 <日本全国宅配現場におじゃまします> 生協しまね  
 <松丸 奨先生の食育エッセイ> 進め栄養！  
 <明日のくらしささえあう CO・OP共済> みやぎ生協・コープふくしま  
 <この人に聴きたい> 科学コミュニケーター 園山由希江さん  
 <ほっとnavi> 生協ひろしま／コープえひめ

生活協同組合研究 2024.11 VOL. 586

## キャッシュレス決済の主流化と私たちの生活

公益財団法人 生協総合研究所 2024年11月 B5判 72頁 定価550円（消費税込）

## 巻頭言

生身の人間としての消費者の弱さ 天野晴子

## 特集

キャッシュレス決済の主流化と私たちの生活  
 歴史から見たキャッシュレス決済 鎮目雅人  
 行政のデジタル化とキャッシュレス決済 松岡清志  
 キャッシュレス決済の主流化と個人情報の保護 金子宏直

キャッシュレス決済の知識と利用に関する注意事項 山本正行

## コラム1

誰もが自由に使えるキャッシュレス決済の実現に向けて  
 ～消費者教育の視点からの提案～ 矢吹香月

## コラム2

中国におけるキャッシュレス社会構築の現状と課題 丘 姉

## コラム3

オランダにおけるキャッシュレス決済の現状とゆくえ 西崎こずえ

■国際協同組合運動史（第32回）  
 国際協同組合デーの流動と  
 1952年日本からのICA再加入について 鈴木 岳  
 ■本誌特集を読んで（2024・9） 松尾 掌・三春・高島勝秀  
 ■新刊紹介  
 宮本みち子・大江守之編『東京ミドル期シングルの衝撃－「ひとり」社会のゆくえ』 山崎由希子  
 ●第33回全国研究集会 「地域からつむぐ協同組合の  
 アイデンティティと明日」（11／30）  
 ●公開研究会  
 「2024年度全国生協組合員意識調査概要報告」（12／12）  
 ●2024年度生協総研賞・  
 第22回助成事業対象者決定のお知らせ

文化連情報 2024.11 No. 560

## 子どもたちの健康と命、見捨てられた現実

日本文化厚生農業協同組合連合会 2024年11月 B5判 72頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 \*注

認知症基本法が問うていること  
 ～新しい認知症観と共生社会 東公敏  
 子どもたちの健康と命、見捨てられた現実 レシャード カレッド  
 トークセッション

教えて！一般病床における口腔管理  
 ～診療報酬改定と多職種連携～  
 李 慶姫 高橋麻衣子 高瀬浩造  
 協同精神のリレー（20）  
 分岐点 JA全中への異動 伊藤澄一

**二木教授の医療時評 (225)**

自民党総裁選挙と石破新総裁・内閣の社会保障・医療政策  
二木 立

**アメリカのメディケア薬価交渉制度**

—第1回薬価交渉の妥結と今後の展望  
高山一夫

**「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (4)**

早稲田大学と東京女子医科大学との医工連携の環境はどう作られたのか  
梅津光生

**野の風 霞ヶ浦編**

農業者・生活者として語る (11) 伝統の祭り継続を  
山口和弘

**稲作の起源と古代日本語**

多様な福祉レジームと海外人材 (77)  
フィリピンのエンターテイナーの起源  
会員農協ズームイン JAみえきた

村上一彦

安里和晃

**会員農協ズームイン JAみえきた****社会運動 2024.10 No.456****社会的経済に向かう韓国市民運動  
韓国協同組合運動100年史翻訳出版記念**

一般社団法人 市民セクター政策機構 2024年10月 A5判 144頁 本体価格1,100円(消費税込)

**FOR READERS**

日本で韓国協同組合運動史を学ぶ意味

**part 1 100年の歴史を読む****韓国協同組合運動100年史 I・II 内容紹介****韓国協同組合運動100年史の執筆者メッセージ**

第21代韓国協同組合学会長	金亨美
聖公会大学社会的経済大学院教授	金昌珍
治療空間心の森社会的協同組合センター長	朴鳳熙
壇国大学HK研究教授	金利徑

**日本語翻訳版の刊行によせて**

一般社団法人日本協同組合連携機構常務理事	伊藤治郎
日本生活協同組合連合会 国際部	天野晴元
一般社団法人全国農業協同組合中央会 (JA全中)	
協同組合連携リーダー	一箭拓朗
全国大学生活協同組合連合会 理事会室	志村貴由樹
日本労働者協同組合連合会 事務局長	中野理
パルシステム生活協同組合連合会 代表理事	理事長 大信政一
生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 常勤理事	
企画部長	前田和記

**part 2 韓国の社会的経済****韓国の社会的経済の現在地を眺める**

京畿道議会政策支援官	崔珉竚
市民セクター政策機構客員研究員	
非営利と経済活動を融合する新たな法人格—社会的協同組合	
新連載 韓国の社会的協同組合のいま ①	
サリム医療福祉社会的協同組合	
株式会社 (IRO, inc) 代表取締役	上前万由子
韓国の社会的経済組織レポート	

「人的資本経営」で今こそ人事への投資を!田中里奈  
臨床倫理メディエーション (77)

意味の人間学① 一ヴィクトール・E・フランクル  
中西淑美

**全国統一献立**

北海道の郷土料理 豚丼 佐藤美香子

**デンマーク & 世界の地域居住 (184)**

「働くことを生きがいに感じられる世界の実現」  
株式会社フォーオールプロダクト (長崎県佐世保市) 松岡洋子

◆第40回厚生連薬剤師研修会 開催のお知らせ

▶線路は続く (190)

自由民権の里をゆく五日市線 // 西出健史

▶最近見た映画

花嫁はどこへ? // 菅原育子

日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会

センター事業団直轄 事業所所長 友岡有希

**part 3 日韓協同組合関係史の背景**

1980年代以降の日韓協同組合の連携の歴史

日本協同組合連携機構 (JCA) 特別研究員

国際協同組合同盟 (ICA)

アジア太平洋調査委員会前委員長 栗本昭

菊田一雄の生涯と生協運動

敬和学園大学人文学部国際文化学科准教授 金耿昊

ハングル講座が拓いた日韓交流の道

エスコープ大阪 専務理事 石川雅可年

ふれあい共生塾(ハングル講座) 講師 翻訳 金丙鎮

ふれあい共生塾(ハングル講座) 講師 翻訳家

韓日市民文化交流協議会ナヌンセ代表 康英美

日本植民地支配下の朝鮮のリアリティ

一橋大学大学院社会学研究科・社会学部教授 加藤圭木

**書評** 『韓国文学の中心にあるもの』 橋本治樹

『韓国社会運動のダイナミズム』 伊藤由起

**連載 食べ物でつくられている私とあなたへ 第2回**

「むしやしない」という京ことばと昆虫食

国際ジャーナリスト 堤 未果

**ボトムアップ民主主義の時代 第3回**

美濃部選挙との比較に見る連舫氏の敗因

政治学者 岡田一郎

**ネット最前線・観測記 ⑥**

「在日認定」を「差別」と問うということ

外国人人権法連絡会事務局次長 灑 大

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✿)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

## 書籍紹介

## 井貝 順子 会員からの書籍紹介

## 韓国文学の中心にあるもの

著者: 斎藤 真理子 出版社: イースト・プレス 價格: 1980 円(消費税込)

## 井貝 順子 会員からのご紹介

国文学翻訳者による、韓国文学ガイド。小説の舞台となった時代ごとに章立てがなされている。この本はあえて現代小説の紹介からスタートし、IMF 危機、光州事件、朴正熙政権下、朝鮮戦争、そして植民地支配からの解放の時代の小説へと、時代を遡っていく。そこには、日本人が忘れてしまった「朝鮮戦争」と、「そこへ至る道」、そして、韓国文学から日本人が何を考えるべきかが示されている。

**なぜこんなにも面白く、パワフルで魅力的なのか。その謎を解くキーは「戦争」にある。**なぜ、韓国文学はこんなに面白いのか。なぜ『82 年生まれ、キム・ジョン』、フェミニズムの教科書となったのか。世界の歴史が大きく変わっていく中で、新しい韓国文学がパワフルに描いているものはいったい何なのか。その根底にあるのはまだ終わっていない朝鮮戦争であり、またその戦争と日本は深つながっている。日本がボッダム宣言をただちに受諾しなかったことが、ソ連の参戦を招き、ひいては朝鮮半島の分割占領、南北問題をもたらした（中略）。そして、そもそも、朝鮮半島の戦後処理をめぐる検討プロセスに朝鮮半島の人々が全く参加できなかったことは、まさに日本による植民地支配の結果である。日本の植民地にされていなければ、たとえ冷戦構造に巻き込まれるにせよ、朝鮮半島の人々自身の選択による全く違う歴史が展開されたはずなのだ（p268）。

「まえがき」で著者が「日本の歴史は、朝鮮半島の歴史と対照させて見るときになまなましい奥行きを持つ」と述べている、そこから生まれた視点が、今までの自分に全く欠けていたことに気づかされた。

日本史で学んだ「朝鮮戦争の特需によって日本の復興がすすんだ」という記述がどんなに恥ずべきことであったのか、それは、今の状況でも起きていること。セウォル号に関しては、政治や社会が正常に機能しなくなりつつある今の日本を予見しているかのような内容でソッとした。民営化によって人命救助が十分にできなかったとか、船長は非正規雇用だったとか、当時操縦していたのは新人だったとか。知床遊覧船の事故も、その後に起きた梨泰院の事故も、根っこは同じな気がする。

斎藤真理子さんが対談で語っている無念「社会のあり方のせいで、死ななくていい人たちが無念に大勢死んでいった。それは、元をたどればやっぱり植民地時代に行きつくんですよ。これが韓国文学を通底する通奏低音だったかもしれません。無念に死んだ人のために真実を証明すること、真実を記録することが大事であるという思いが、文学だけじゃなくてモノを創る人たち全般に共通であるような気がします。」

## 研究センター12月活動の計画

- 1日(日) 三河地域懇談会「コープ安城よこやまへ寄らまいかん」
- 2日(月) 尾張地域懇談会
- 3日(火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」12回
- 5日(木) 協同組合等研究組織交流会(名古屋開催)
- 7日(土) 第21回東海交流フォーラム第4回実行委員会、第3回理事会
- 10日(火) 研究フォーラム地域福祉をささえる市民協同  
名城大学人間学部「ボランティア入門」13回、地域福祉フォーラム
- 12日(木) 協同の未来塾⑥
- 14日(土) 「ぞう列車がやってきた」(合唱と創作講談・平和企画)
- 15日(日) 難民食料支援仕分け発送
- 17日(火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」14回
- 19日(木) 三河地域懇談会世話人会
- 20日(金) 尾張地域懇談会
- 22日(日) 多文化社会と協同組合懇談会
- 23日(月) ウクライナ避難民支援情報共有会議
- 24日(火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」15回

地域と協同の研究センター  
ホームページ  
下記QRコードでご覧ください。  
ホームページQRコード



地域と協同の研究センター  
Facebook  
下記QRコードでご覧ください。  
FacebookQRコード



※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。

参加の前にホームページ等でご確認ください。